NEWSLETTER

No. 48　December　2011 v. 2

第 19 回 地球環境シンポジウム報告
第 20 回 地球環境シンポジウム速報

EARTH & FOREST

土木学会 地球環境委員会

********** 目　次 **********

巻頭言	地球環境委員会　委員長	山田　正	P. 1
地球環境委員会　副委員長就任のご挨拶	地球環境委員会　副委員長	松下　潤	P. 3
第 19 回地球環境シンポジウムの開催報告	第 19 回地球環境シンポジウム実行委員会　委員長（茨城大学）	三村　信男	P. 5
第 19 回地球環境シンポジウムの記録写真			P. 6
第 19 回地球環境シンポジウム、一般公開シンポジウムの開催報告	地球環境委員会　幹事長	井上　智夫	P. 10
第 19 回地球環境シンポジウムの表彰報告			P. 12
土木学会全国大会研究討論会の開催報告	地球環境委員会　副幹事長	豊田　康嗣	P. 16
平成 23 年度第 1 回地球環境委員会開催のご報告	地球環境委員会　副幹事長	豊田　康嗣	P. 18
第 20 回地球環境シンポジウムの開催	地球環境委員会（京都大学）	米田　稔	P. 20
地球環境委員会 平成 23 年度 委員会・幹事会の構成			P. 21
地球環境委員会からのおしらせ			P. 22

****

巻頭言

理解と信頼

地球環境委員会　委員長　山田　正（中央大学 理工学部）

放射能は怖いかと問われてこれにきちんと答えられる人が何人いるのだろう。この“きちんと”と言うのが難しい。ある人がきちんと答えたつもりでも、人によっては「でも、やっぱりね」、「こわいものはこわいわね」と言った返事となる。我々理系に身を拠く者ですら分野が違うと、いくら論理的に説明してもらっても、一抹の不安が残ってしまう。ましてや非理系の人にしゃべっても、人類の文明がいくら進歩しようとも放射能などという“目には見えぬども”の世界は、「幽霊こわい」と言ったものと同列なのであろう。いくら何千年と文明が進んでも、目に見えないものは人はこわいのであろう。最近は飛行機を恐がる人は減ったような気がします。30～40 年前には飛行機を恐がる人はもう少し今より多かった気がします。一体世界の人であんなに重い飛行機がなぜ空を飛べるのかを“きちんと”理解している人が何人いるのだろう。理解してない、理解できなくても飛行機恐怖症は確実に減っている。risk と信頼で受容限界以下になったのであろう。では放射能はどうだろう。

今出ている放射能はβ線とγ線、β線は電子、γ線は波長の短い電磁波、今は見なくなったブラウン管式テレビや、今も天井から明かりをともしている蛍光灯の中は電子だらけ、一年一回受ける健康診断はレントゲン写真でγ線よりももう少し波長の長いX線を使う。でも量が多すぎたり、強すぎると有害なのだ。有害とは何がどういう機構で、どういう条件のときに我々にとって有害なのか。飛行機なら墜落、衝突という目に見える事故があるのでわかりやすい。多すぎる、強すぎるβ線やγ線は我々の身体の細胞のその中の核のそのまた遺伝子の、そのまた DNA 二重らせんを構成する分子の鎖を破壊すると言う。

ところが我々人間の身体には自然由来のカリウムの同位体カリウム４０や鉛、ポロニュウム等の同位体からの放射線が毎秒 4000～7000 コ出ていると言う。4000～7000 ベクレル（Bq）だ。カリウム４０の半減期は 12 億 6000 万年。地球の歴史は 45 億年だから、カリウム４０は地球でできたものではなく、太陽系創造より前の超新星爆発のときに出来たと言う。我々の体の中に超新星爆発の名残が残っていて、今も我々の体の中で何かしらの活動している。毎秒 4000～7000 発もの放射線を出しているわけである。生命とは何ともろく、かつしぶといものなんだろうと思わざるを得ない。この部分の認識がいま求められているのではないのだろうか。タバコスモーカーやその副流煙を吸う人が肺がんになるのは何もニコチンやタールの化学作用が主原因でなく、物理的にはタバコに含まれる鉛やポロニュウム等の自然由来の放射線同位体からの肺の細胞内の遺伝子の改変によるガン細胞の増殖の様だ。地球環境委員会のニュースレターを読まれる方々。人類が直面しているこの目に見えぬ何かしらと、研究面で真正面から取り組んでみようではありませんか。放射能被害はそれこそ地球規模の環境問題です。いずれ当委員会にしても何らかの活動を立ち上げるつもりです。

地球環境委員会　副委員長就任のご挨拶
地球環境委員会のミッションと「横串的発想」

地球環境委員会　副委員長　　松下　潤（芝浦工業大学）

１．地球環境委員会と横串的発想

本年 9 月の第 19 回地球環境シンポジウム（茨城大学）を経て、20 周年の節目を迎える来年度を睨み、新委員長の山田正先生を補佐する立場として微力ながら副委員長に就くことになりました。

この地球環境委員会は、1992 年の国連リオ地球サミットを契機として、土木学会傘下の各委員会に「環境という横串」を通し、地球環境問題を統括的に扱う横断型組織として立ち上げられました。大学では講座がネットワーク型の研究を阻害する壁となりがちですが、学会にも同じような傾向があるため、地球環境委員会の活力を維持することが課題であると感じています。筆者としては、組織や立場の違いを乗り越えるため「横串的発想」で事に当たりたいと念じています。ご支援、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

本委員会のミッションは、いうまでもなく地球環境問題に関わる研究の遂行にあります。しかし、研究の遂行においては、問題を科学的に分析するとともに、合理的な解決策を示すことが肝要です。その意味で、地球環境シンポジウムの研究発表の中で政策シナリオ提案型の論文の数が確実に増えていることは心強い限りですが、筆者自身は、研究成果を社会に還元することを目標においています。その理由は、人々が技術を社会に繋ぐ土木工学本来の「横串的な役割」に期待してくれている実感を持つので、古風な表現ですが、ここで人々の期待に応えなければ ‘男がすたる’（笑い）と思うからです。

２．重点検討課題と横串的発想

私ども土木に関わる人間は、道路や河川、下水道などの様々なインフラシステムの整備を通して、国民が健やかに生活できる社会経済的条件を確立してきました。その一方では、首都圏にみるように世界最大スケールの大都市圏モデルを下支えする‘縁の下の力持ち’としての役割を担ってきたといえます。

過去のインフラシステムの整備過程を辿れば、「エネルギーの領域」では、終戦直後には電源開発への重点投資と石炭から石油への転換が進み、1970 年代の石油危機以降は一転、省エネと脱石油（原子力を含む多様化）が課題となりました。3･11 東日本大震災以降は、温暖化ガス排出抑制の切り札とされてきた原子力の見直しと代替手段としての再生可能エネルギーの取り扱いが新たな課題となるに到りました。

これに対して、「水の領域」では、高度経済成長の急激な都市化にインフラ整備が遅れた結果、様々な問題が発生しました。［下水道］では、水俣病に代表される産業公害問題の苦い経験から汚染者負担原則のもとで、浄化槽等の発生源対策と公共下水道を併用する総合的下水道対策を導入。［河川］では、都市河川の都市型洪水に対処するため、都市側と河川側の治水分担による総合治

水対策を適用。また［水道］では、大都市圏における水不足問題を背景に広域的水資源開発を進める一方で、漏水対策などの供給側の対策と下水処理水循環利用などの需要側の対策を組み合わせた形の総合的節水対策を導入。・・・その結果、いずれの分野においても世界的にトップクラスの成果をあげています。

わが国が持つこのような集中・系統型と小型・分散型から成る複合インフラシステムの構築ノウハウは、都市化の圧力が小さい欧米諸国にはない特長であると評価することができます。私どもにとって、都市化が著しい途上国に向けた技術移転の仕掛けづくりは第一の重点課題であると思います。

これに対して、国内における建設投資額を見ると、土木・建築を併せた総額は現在 40 兆円で、この 20 年間に半減してしまいました。一方、奇しくも高齢者の医療・介護費は併せて 40 兆円ですが、日本が世界の超高齢化社会の先頭に立つ 2025 年には倍増するといわれています。消費税等による新たな建設投資財源の確保が容易ではないとすれば、新規建設投資からストック改善投資への傾斜は避けられないと見るべきです。

このような厳しい状況のもとで、わが国の社会に資源循環システムや再生可能エネルギーを組み込むことは、持続的な社会構造への転換という意味でも、また技術疲労の抑止という意味でも重要な課題です。実施に向けては、前述の複合インフラシステムに係る「横串的な技術体系」の再構築が必須であります。私どもにとって、この点が第二の重点課題であると思います。

３．終わりに

翻れば、3.11 東日本大震災は、日本列島に内在する震災リスクを再認識させるとともに、復興事業を通してどのような国土形成を果たそうとするのかを我々に問いかけています。筆者はいま国交省の依頼により、三陸・久慈エリアの市街地復興計画を支援する立場でもあるのですが、被災地域では、防災基盤強化と市街地復興に加えて、少子・高齢化対策や地域産業の再創生等、様々な課題を同時併行的に検討する必要があると実感します。

「横串的発想」にとって、まさしく正念場です。

第 19 回地球環境シンポジウムの開催報告

第 19 回地球環境シンポジウム実行委員会
委員長　三村　信男（茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター）

第 19 回地球環境シンポジウムは、9 月 15 日と 16 日の 2 日間、茨城大学水戸キャンパスで開催されました。参加者は９９名、会場係などの学生を入れると約１２０名という多数の参加でした。地球環境委員会は、来年で 20 周年を迎えますが、それに向けた催しになった行事の内容をご報告します。

１．発表セッションとポスターセッション

今年のシンポジウムは、多数の論文申し込みがあり、１５の発表セッションを設けました。A 論文（全文審査）は３５編、B 論文（概要審査）は２８編で、その他に、パネル展示・技術活動紹介が１８件ありました。発表セッションは、気候変動、都市環境とエネルギー消費、CO_2 排出削減、途上国の環境問題、河川・地盤情報など多岐にわたっています。発表される話題には、国際的交渉や環境省・文科省の進行中のプロジェクトの研究報告も多く、ホットな研究・調査に関する情報交換が行われました。地球環境問題の解決策を考える上では、多様な視点や社会的要請への対応が重要であることを考えると、ホットな研究・調査の情報交換というこの点は、本シンポジウムの特徴として今後一層伸ばすべき方向ではないかと思います。

また、１日目の夕方に、同じキャンパス内の生協食堂で懇親会を開き、無料招待の学生を入れると６０名以上参加の盛会になりました。２時間程度でしたが、突然の企画で次世代を担う各大学の学生の自己紹介なども行われ、盛り上がりました。その後の二次会で水戸市経済への貢献もありました。

２．一般公開セッション「安全安心社会の可能性～温暖化に備える新しい技術と政策～」

２日目の午後に、一般公開セッションが開かれました。これは、地球環境委員会が主催して、シンポジウムの機会に開催するものです。今年は「安全安心社会の可能性～温暖化に備える新しい技術と政策～」というテーマの下に、井上地球環境委員会幹事長の司会によって、山田委員長をはじめ５名のパネラーが意見表明と会場との討論を行いました。約７０名の方が熱心に参加しました。話題は、温暖化のリスクや気候変動の対策、福島原発事故・節電への対応と今後の電力供給など多岐にわたりました。その中で、学会の研究成果・提言を社会にどう生かすかに話が及び、学会・研究者が粘り強く主張していくことの重要性や逆に勇気を持って将来ビジョンを提案することといった意見が、会場との間で交わされました。

３．表彰式と閉会式

最後に、表彰式と閉会式が行われ、地球環境論文賞３件、地球環境優秀講演賞３件、さらに、地球環境技術賞と地球環境貢献賞各１件が授与されました。

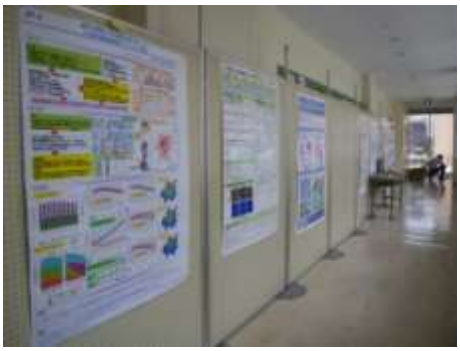
本シンポジウムを開催するに当たって、豊田副幹事長、実行委員会の横木副委員長、桑原幹事長、大西副幹事長をはじめ委員の皆様には大変なお骨折りを頂きました。そのお陰で、多数の方にご参加いただきましたことを心から感謝いたします。

第 19 回地球環境シンポジウムの記録写真

茨城大学 水戸キャンパス、2011 年 9 月 15 日～16 日

受付

受付
当日申込
受付



12番教室
本 部

WELCOME

WELCOME

第19回 地球環境シンポジウム

第 19 回地球環境シンポジウム 一般公開シンポジウムの開催報告

地球環境委員会 幹事長　井上 智夫（国土交通省 水管理・国土保全局）

2011 年 9 月 15 日（木）～16 日（金）、茨城県水戸市の茨城大学で開催された第 19 回地球環境シンポジウムの特別企画として、16 日（金）13:00～15:20、「『安全安心社会の可能性』～温暖化に備える新しい技術と政策～」と題する一般公開シンポジウムを開催した。地球環境シンポジウム本体が、主に土木学会の会員の研究発表により実施される一方で、この一般公開シンポジウムは、地球環境問題に取り組んでいる産学官の第一線の方々に多様な角度から意見を述べていただくパネルディスカッション形式で実施され、開催地、産学官の幅広い関係者や必ずしも地球環境問題に直接携わっていない方々も含む約１００名の方が参加した。

一般公開シンポジウムのプログラムは、下記のとおりであった。

パネリスト・話題提供：

温暖化とともに生きる安全安心社会

三村信男　茨城大学 広域水圏環境科学教育研究センター 教授

巨大災害への対処・計画外力を超える外力への取り組み

山田　正　中央大学 理工学部都市環境学科 教授

電力供給危機・需要削減への取り組み

杉山大志　(財)電力中央研究所 社会経済研究所 上席研究員

省エネ社会の実現のための新技術　有機ハイドライドを使った蓄電機能の充実

青木純一　(株)日立製作所 ディフェンスシステム事業部情報システム本部主管

保水セラミックスによる都市浸水緩和・ヒート・アイランド抑制

今井茂雄　(株)ＬＩＸＩＬ 総合研究所企画推進室

司会・進行：　井上智夫　国土交通省 水管理・国土保全局水利技術調整官

まず、各パネリストから最近の情勢について報告があった。三村先生からは、気候変動の影響は異常な現象として既に現れていること、それに対する適応策の実施は地域によって異なること、今後、短期・中長期の対策を考えていく場合にも定期的な見直しが必要であること等、地球環境問題に対処する場合の重要な方向性について示唆があった。杉山氏からは、東日本大震災について触れ、現在の大規模集中電源があったからこそ早期の復旧ができたのであり、今後スマートグリッド等を導入していくことを考える際には、災害時の対応やコストも含め総合的に評価していくことの重要性に関する見解が提示された。青木氏からは、有機ハイドライトを活用した蓄電・備蓄に関する新技術の展開状況、特に、時間・空間に依存しないエネルギー利用が将来の生活・経済に与える重要な効果・意義について紹介があった。今井氏からは、都市のゲリラ豪雨やヒート・アイランド対策に資する技術について、特にその製品開発の段階から多様な観点による評価を取り入れるプロセスを早期の段階から構築することの重要性について紹介があった。山田先生

からは、安全・安心社会をめざすにあたって、「安心」は個人差のあるものであるが、「安全」については国が基本的に形成すべき取り組みであるという考え方が示されるとともに、東日本大震災における現象を想定外とするのではなく、安全を考える際の対象として捉えていく重要性について示唆があった。

その後、これらの報告の共通事項として、技術開発の方向性として、①平常時と緊急時の両方への対応、②普及・汎用性と技術・行政の縦割り、③短期的な対応と中長期的な取り組み（ライフサイクルコスト低減の重要性を含む）を切り口としたパネリスト間の意見交換がなされた。意見交換の中では、分野間のコミュニケーションの促進、社会が受け止める技術の評価の適切な把握、基礎・教育を重視した大学研究と実証型の行政研究と融合等について熱心な発言があった。

今回の一般公開シンポジウムでは、パネリストの構成も産学官のバランスを重視し、異分野間での技術の方向性の共通項・差異について認識が深まったことが有意義であった。一方、こうした認識の共有を、学会活動を通じてさらに活発化させていくことの課題も浮き彫りになった。来年度においては、さらなる企画の改善が求められる。

第 19 回地球環境シンポジウムの表彰報告

茨城大学 水戸キャンパス、2011 年 9 月 16 日

地球環境委員会では、地球環境委員会委員長らからなる表彰小委員会委員らによる厳正なる採点により4つの賞を設定し授与しています。第19回地球環境シンポジウムでは、

・地球環境論文賞(JSCE GEE Award)・・3編
・地球環境優秀講演賞・・3編
・地球環境技術賞・・１編
・地球環境貢献賞・・１編

が授与されました。今年度の授与概要を報告させて頂きます。

■授与概要

●【地球環境論文賞(JSCE GEE Award)】

「バイオガス回収施設の費用対効果と事業実施に伴う CO_2 削減効果に関する研究」
〇山口工、竹内恒夫（名古屋大学大学院環境学研究科）

「温暖化政策支援モデルを用いた気候変動に対する斜面崩壊影響評価」
〇川越清樹（福島大学大学院共生システム理工学研究科)、肱岡靖明（国立環境研究所社会環境システム研究領域)、高橋潔(国立環境研究所地球環境研究センター)

「標高モデルに起因する海面上昇の全球影響評価の不確実性」
〇信岡尚道（茨城大学工学部都市システム工学科)、三村信男（茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター)

●【地球環境優秀講演賞】

「将来の車両・エネルギー技術進歩が運輸部門 CO_2 排出量に与える影響の評価」

○山本充洋、加藤博和、伊藤圭（名古屋大学大学院環境学研究科）

「中国の社会経済成長と詳細地域の水需要ギャップへの影響−黄河と長江における年間流出解析−」

○大西暁生（名古屋大学大学院環境学研究科）、森杉雅史（名城大学都市情報学部）、田中広樹（名古屋大学地球水循環研究センター）、井村秀文（名古屋大学大学院環境学研究科）

「日本の主要流域における環境容量の試算と GIS の活用」

○大西文秀（竹中工務店プロジェクト開発推進本部）

●【地球環境技術賞】

「～火力発電所から排出される CO2 を活用～製造時の CO2 排出量をゼロ以下にできる環境配慮型コンクリートの開発」

〇鹿島建設株式会社、中国電力株式会社、電気化学工業株式会社

●【地球環境貢献賞】

「持続可能な未来の創造に向けた廃棄物の物理的・化学的特性を活用した環境負荷低減技術」

〇海野円、小峯秀雄、磯秀幸、本橋悠、渡邊保貴（茨城大学）

及川照靖（現前田建設工業株式会社、元茨城大学）

4 賞の授賞式は、第 19 回地球環境シンポジウム、一般公開シンポジウムの閉会式とあわせ行われ、山田正地球環境委員会委員長より受賞者への賞状の授与が行われました。

受賞者の皆さま、おめでとうございました。

第19回地球環境シンポジウムは、三村信男第19回地球環境シンポジュウム実行委員会委員長、横木裕宗同副委員長、桑原祐史同幹事長、大西文秀同副幹事長のもと、下記実行委員会により運営されました。実行委員会の皆さまお疲れさまでした。

■第19回地球環境シンポジウム実行委員会の構成 （50音順）

委員名	氏 名	所 属
実行委員長	三村 信男	茨城大学
実副委員長	横木 裕宗	茨城大学
実行委員	風間 聡	東北大学
実行委員	川越 清樹	福島大学
実行委員	小峯 秀雄	茨城大学
実行委員	斎藤 修	(株)福山コンサルタント
実行委員	白川 直樹	茨城大学
実行委員	田村 誠	茨城大学
実行委員	藤田 昌史	茨城大学
実行委員	藤森 真理子	パシフィックコンサルタンツ(株)
実行委員	安原 一哉	茨城大学
実行委員	山田 和人	パシフィックコンサルタンツ(株)

委員名	氏 名	所 属
幹事長	桑原 祐史	茨城大学
副幹事長	大西 文秀	(株)竹中工務店
幹　事	大野 文良	清水建設(株)
幹　事	藤原 靖	大成建設(株)
幹　事	三浦 一彦	鹿島建設(株)

■第19回地球環境シンポジウム 業界・教育研究機関案内協賛組織（8月25日時点申込み順）

組織名
鹿島建設(株)
(株)建設技術研究所
(財)電力中央研究所
高知工科大学
いであ(株)

組織名
(株)エックス都市研究所
パシフィックコンサルタンツ(株)
大成建設(株)
中央開発(株)
芝浦工業大学

組織名
(株)福山コンサルタント
(株)ユードム
(株)電通
(株)セレス
(株)日立製作所

開催地の組織をはじめとして多くの機関案内の協賛をいただきました。
皆さまのご支援、ご参加ありがとうございました。

第19回地球環境シンポジウム実行委員会

土木学会全国大会研究討論会の開催報告

地球環境委員会　副幹事長　　豊田　康嗣（電力中央研究所）

地球環境委員会は、平成 19 年～20 年に時限付き特別委員会として設置された地球温暖化対策特別委員会の運営主体として活動してまいりました。その活動をうけて、土木学会の全国大会にて、仙台（平成 20 年度）、福岡（平成 21 年度）、札幌（平成 22 年度）と 3 回にわたって「地球温暖化対策－土木学会はいかに行動すべきかー」と題した研究討論会を実施してまいりました。いずれの研究討論会でも 100 名前後の多数の参加をいただき、会員の高い関心を実感し、これらのまとめとしてニュースレターN0.46 に村尾前幹事長が報告されています。

今年の全国大会研究討論会は、3 月 11 日の東日本大震災による福島原子力発電所の被災を受け、震災と放射能問題について討論会を開催しました。

テーマ：震災復興と地球環境問題　～土木の目から見た震災と放射能問題～
日　時：9 月 9 日 12 時 40 分～14 時 40 分
場　所：愛媛大学共通教育北別当　北 41 号室

話題・話題提供者：
（1）土壌の放射能吸着
　恩田裕一　筑波大学大学院 生命環境科学研究科 教授
（2）放射能の吸着・除去技術
　竹村公太郎　（財）リバーフロント整備センター 理事長
（3）人体に残留・人体から排出される放射能
　山田　正　中央大学 理工学部都市環境学科 教授（地球環境委員会委員長）
司会：豊田康嗣　電力中央研究所 地球工学研究所（地球環境委員会副幹事長）
聴講者数：約 120 名

土木学会では論じられることの少なかった放射能に焦点を当て、「現状がどうなっているのか」、「対策はどうするのか」、そして、「人体への影響はどうなのか」について、最新の研究成果を 3 人の講師から紹いただきました。

恩田教授からは、土壌中のセシウム濃度の測定法についての紹介と、それを用いた最新の測定結果について報告をいただきました。竹村理事長からは、放射能汚染された下水汚泥の減容化について、自ら測定された結果と減容化の際に供出される超微細炭素の特性について紹介され、減容化の効果と新素材の利用性についてご提案をいただきました。山田教授からは、核実験盛事からのセシウム濃度の経年変化を示されるとともに、医学的見地と異なるバルク的なモデルを用い

た人体中のセシウム濃度シミュレーションの紹介とその解析結果について興味深い結果を示されました。

話題提供者間の意見交換の後、会場から多くの質問がなされ、土壌以外のセシウム濃度や放射能除去技術の技術的・法的課題への質問をいただきました。討論会の最後には、放射能除去は土木事業としての責務であること、そのための現状把握（過去の履歴や人体影響も含めた）をしっかりと行わなければならないといった結論に至ることができました。

放射能の吸着・除去技術を発表された竹村氏

150 部用意していた竹村理事長の要約ならびに地球環境シンポジウムのお知らせの残りが約30部あったことから、参加者はおよそ 120 名と推定されます。司会の不手際でやや時間を超過しましたが、ほとんどの聴衆者に最後まで参加いただき、盛況な討論会となりました。

貴重な研究をご発表いただきました３人の先生方、熱心に討論に参加いただいた聴講の皆様、会場のお手伝いをしていただきました愛媛大学の皆様、本紙面を借りてお礼を申しあげます。本当に、ありがとうございました。

土木学会全国大会（平成 23 年度・愛媛大学）

平成 23 年度第1回地球環境委員会の開催報告

地球環境委員会 副幹事長　豊田 康嗣(電力中央研究所)

年度はじめの地球環境委員会は、例年ですと年度はじめに行われるのが慣例でしたが、東日本大震災の影響で実施を見送っておりました。三村先生以下、地球環境シンポジウム大会実行委員会の皆様のご尽力により、予定通り 9 月 15～16 日に地球環境シンポジウムを開催する運びとなりました。シンポジウム初日の昼食休憩時を利用させていただき、平成 23 年度地球環境委員会の第 1 回目を開催させていただきました。

冒頭に、平成 23 年度の地球環境委員会委員ならびに執行部の紹介がなされ、あわせて出席委員の自己紹介が行われました。引き続き、山田委員長からの挨拶があり、地球環境問題の解決はもとより、東日本大震災による日本の復興と、復興支援のために役立てる研究を支援していく活動方針が述べられました。このためには、これまでの知識をうまく役立てるためのベテランの力と、今後の困難を乗り越えるための若い力を結集するべきとの所信演説でした。

委員会では、同時に開催された第 19 回地球環境シンポジウムの概要報告がなされたほか、震災後活動を再開した委員会の活動について報告、各小委員会からの報告がなされました（本報告末の議事次第を参照ください)。村尾特任幹事からは、英文論文集 Jornal of Global Environment Engineering の土木学会英文論文集への移行措置として、編集委員会設置の提案がなされ、論文査読体系についての議論が活発に行われました。

来年度の地球環境シンポジウムについて、場所は未定であるが、開催が決定されたことを井上幹事長より報告されました（その後、正式に京都大学で開催されることが決まりました。詳しくは本ニュースレターの米田先生からの報告をご参照ください)。

参考として、委員会の議事次第を下記に添付いたします。

平成 23 年度第 1 回地球環境委員会　議事次第

日時：平成 23 年 9 月 15 日 11:50～12:50
場所：茨城大学　水戸キャンパス　人文学部 A201 号室　地域連携コラボレーションルーム
出席者：計 22 名

顧問	太田
執行部	山田（正)、井上、豊田
特任幹事	松下、村尾、鼎、花崎、山田（智）
委員兼幹事	荒巻、加藤、河瀬、松本
委員	大西、大野、桑原、東海林、藤原、三浦、三村、宮本、山崎

議事次第

１．開会　（進行：井上幹事長）

２．山田委員長挨拶

３．新旧委員および新執行部紹介

４．報告事項

（1）ニュースレター発行について（大西委員）

（2）研究討論会開催報告（豊田副幹事長）

（3）今年度地球環境シンポジウムについて（三村実行委員長）

（4）来年度の地球環境シンポジウムについて（井上幹事長）

（5）各小委員会からの報告

①政策小委員会（荒巻委員兼幹事）

②土木学会論文集部門 G 編集小委員会（桑原委員）

③JGEE 編集小委員会（村尾特任幹事）

④表彰小委員会（村尾特任幹事）

（6）その他報告事項

①環境賞選考委員会委員推薦（井上幹事長）

５．意見交換

平成 23 年度第 1 回地球環境委員会

（茨城大学 水戸キャンパスにて）

平成 24 年度　第 20 回地球環境シンポジウムの開催

地球環境委員会　　米田　稔（京都大学）

来年度、節目となる第 20 回の地球環境シンポジウムを、京都大学が幹事校となり、松岡譲先生を実行委員長として、京都にて開催することになりました。日程、会場については、まだ検討中ですが、20 周年を記念する華やかな大会にしたいと考えております。

前回、京都で地球環境シンポジウムを開催したのは 1995 年（平成 7 年）7 月 7 日～8 日に京大会館で第 3 回シンポジウムを開催した時になります。（幹事会が平成 7 年 7 月 7 日に開催されており、記憶しやすい。）土木学会誌 4 月号別冊増刊「地球共生時代の土木」に「土木学会地球環境行動計画アジェンダ 21／土木学会」を掲載した翌年であり、土木学会全体として地球環境問題への取り組みが熱気を持って語られていた時でした。

京都での開催という点では、COP3 京都会議を間近にひかえた 1997 年 11 月 14～15 日に京都大学工学研究科環境地球工学専攻との共催にて開催した特別企画シンポジウム「温暖化防止に向けた技術の可能性」の方が印象深いかもしれません。ロバート・ディクソン(米国)、アチャ・スガンディ(インドネシア)の 2 専門家による国際状況が直接聴けたほか、産業界各企業の分野別取り組みの情報などが報告され、土木界がとるべき行動の方向を示す機会になったといえます。

そのころからすでに十数年が経過しましたが、当時の報告書などを見ても、それほど古さを感じません。逆に言えば、当時からの地球環境問題に対する対応の歴史は、それほど進んでいない、ということを示しているのかもしれません。2002 年 7 月 16～17 日に第 10 回地球環境シンポジウムが国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された時には 10 周年記念特別企画として、「環境問題の世界的潮流と土木の取り組み：この 10 年」と題した特別セッションが開催されました。そこでは土木学会地球環境委員会による 10 年の活動の総括と、土木の分野における地球環境研究・保全対策技術開発、とりわけわが国の国際的取り組みについての紹介に続き、作る土木から保全する土木への転換や土木工学（ハード）から「市民工学」（ソフト）への脱皮などが議論されています。

さて、20 周年、どのような企画が良いか、現在、京都大学の幹事団（予定）内で検討中です。鳩山首相が国際公約として発表した CO_2 の 25%削減も、今年 3 月の東北大震災と原発事故による電力不足の影響などから、マスコミ上ではまったく議論されなくなっています。また、京都大学工学研究科において、地球環境問題を担うことを目指して設立した環境地球工学専攻は、発展的解消として今は都市環境工学専攻など、むしろ従来の専攻組織に近い形に再編され消滅しています。このように必ずしも順調に進んでいるとは言い難い状況にある地球環境問題に対する社会的状況ですが、一方、昨今の TPP 騒ぎを 1 例として、様々な分野での国際化はますます避けて通れない状況となりつつあります。

おそらく来年の 9 月になると思いますが、京都にて地球環境問題に関する熱い議論を再び皆様と交わせる企画を計画したいと考えております。ご期待下さい。

地球環境委員会　平成 23 年度　委員会･幹事会の構成

■委員長・幹事長・副幹事長

委員名	氏 名	所 属
委員長	山田　正	中央大学
副委員長	松下　潤	芝浦工業大学
幹事長	井上　智夫	国土交通省 水管理・国土保全局
副幹事長	豊田　康嗣	(財)電力中央研究所

■顧問

委員名	氏 名	所 属
顧　　問	北田　敏廣	豊橋技術科学大学
顧　　問	松岡　譲	京都大学
顧　　問	太田　幸雄	北海道大学

■委員メンバー

委員名	氏 名	所 属
特別委員	五道　仁実	国土交通省 水管理・国土保全局
特別委員	室石　泰弘	環境省　地球環境局
特別委員	山本　悟司	国土交通省 大臣官房 技術調査課
委　　員	市川　陽一	龍谷大学
委　　員	大西　文秀	(株)竹中工務店
委　　員	大野　文良	清水建設(株)
委　　員	桑原　祐史	茨城大学
委　　員	東海林 孝幸	豊橋技術科学大学
委　　員	奈良　松範	諏訪東京理科大学
委　　員	藤原　靖	大成建設(株)
委　　員	松嶋　健太	(株)建設技術研究所
委　　員	松村 寛一郎	関西学院大学
委　　員	三浦　一彦	鹿島建設(株)
委　　員	三村　信男	茨城大学
委　　員	宮本　善和	中央開発(株)
委　　員	山崎　智雄	(株)エックス都市研究所
委　　員	山田　和人	パシフィックコンサルタンツ(株)
委　　員	米田　稔	京都大学

■幹事メンバー

(50 音順)

幹事名	氏 名	所 属
特任幹事	鼎　信次郎	東京工業大学
特任幹事	花崎　直太	(独)国立環境研究所
特任幹事	村尾　直人	北海道大学
特任幹事	山田　朋人	北海道大学
幹　　事	荒巻　俊也	東洋大学
幹　　事	加藤　博和	名古屋大学
幹　　事	河瀬　玲奈	京都大学
幹　　事	津旨　大輔	(財)電力中央研究所
幹　　事	中北　英一	京都大学
幹　　事	古川　恵太	国土技術政策総合研究所
幹　　事	松本　朗	(株)不動テトラ
幹　　事	吉津　洋一	関西電力(株)

※詳細は下記、地球環境委員会ホームページをごらんください。

http://www.jsce.or.jp/committee/global/gaiyou/iinkai_gaiyou02.htm

地球環境委員会からのおしらせ

●地球環境委員会副委員長の就任

平成 23 年度地球環境委員会副委員長に松下潤先生（芝浦工業大学）が就任されました。

松下潤先生には永く地球環境委員会の運営にご尽力いただいて参りましたのでご存じの方も多いと思います。一層のご指導を賜りたいと思いますので、皆さまのご支援よろしくお願いいたします。

●第 20 回地球環境シンポジウムの開催地が決定

平成 24 年度の第 20 回地球環境シンポジウムの開催地が京都に決定いたしました。

本号での米田稔先生のご報告にありましたように、京都大学の松岡譲先生（地球環境委員会顧問）、米田稔先生、倉田学児先生らのご尽力で進められる予定です。記念すべき第 20 回への皆さまのご参加、ご支援をお願いいたします。ニュースレターでも順次ご案内いたします。

●メディア関連

○9 月 6 日の NHK のクローズアップ現代「止まない雨～緊急報告 紀伊半島豪雨～」に、地球環境委員会の中北英一幹事（京都大学防災研究所）がスタジオ出演されました。

○10 月 25 日の NHK のクローズアップ現代「タイ大洪水 苦悩する日系企業」とニュースに、地球環境委員会の山田正委員長（中央大学）がビデオ出演されました。

○土木学会誌 2011 年 11 月号と日刊建設工業新聞（10 月 3 日）に、地球環境委員会の大西文秀委員著の「環境容量からみた日本の未来可能性」（大阪公立大学共同出版会刊）の書籍案内が掲載されました。

【編集後記】

ニュースレター48 号をお届けいたします。本年 3 回の発行へのご支援感謝いたします。
9 月には第 19 回地球環境シンポジウムが茨城大学で盛況に開催され、第 20 回地球環境シンポジュウムが来年京都で開催されることになりました。順次ご案内いたします。
本格的な冬を迎えます。皆様どうぞご自愛ください。

発　行：(社)土木学会 地球環境委員会
〒160-0004
東京都新宿区四谷1丁目
外濠公園内

●地球環境委員会についての問合先
事務局担当　　佐藤雅泰
TEL:03-3355-3559 FAX:03-5379-2769
●ニュースレターについての問合先
第 48 号編集責任者　大西文秀
E-mail：ohnishi.fumihide@takenaka.co.jp